

多様化する学習者への取り組みーベトナム編ー

松田真希子（金沢大学国際機構留学生センター）

外国語学習者の習得は、社会・文化的に影響を受ける外的要因と、学習者の一般的な特性である内的要因、言語特性（難易度）などが複合的に絡み合って進むといわれている。同じ日本語の授業を受けても、早く習得が進む学習者もいれば、なかなか習得が進まない学習者もいる。

過去に日本語学校で学ぶ日本語学習者は中国人、韓国人が中心であったが、数年前から非漢字圏の留学生が増加し、中でもベトナム人学習者の増加が顕著である。平成25年度 JASSO の留学生調査では中国、韓国に次いで第3位(6,290名)である。

しかし、ベトナム人学習者が他国の学生と同時に教室で日本語を学習し始めても、同じように習得が進まないと感じる教師は多い。図は大学の初級日本語クラスで学ぶ留学生の『みんなの日本語』1の初級終了時のテストの結果の箱ひげ図である。受験者数はそれぞれ10名程度、中央の線が平均点である。

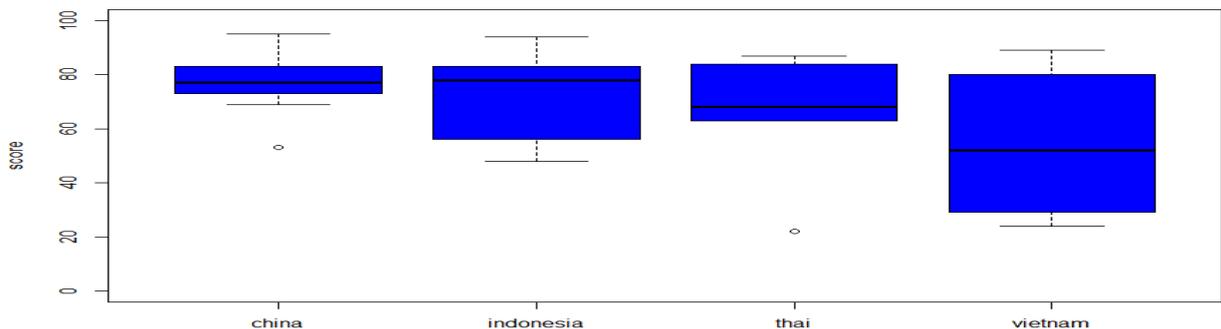


図1 みんなの日本語初級終了試験の成績（中国、インドネシア、タイ、ベトナム）

図より、ベトナム人学習者は非上位から下位までの差が大きく、平均が下（56点）になっていることがわかる。また、図には現れないが途中放棄するベトナム人学習者も多く存在する。

言語習得は学習者適性が最も大きく影響すると言われている（山崎 2005）。確かにベトナム人学習者の中にも優れた成績をあげる学習者もいる。しかし、集団として見た場合、特に初級においては他の母語の学習者と比べ習得が遅れがちであることもまだ事実である。ベトナム人日本語学習者には非漢字圏というだけでは説明できない習得上の問題があるのではないだろうか。

この分科会では、ベトナム人学習者を例に、特に言語特性と習得の問題に焦点をあて、その対策について考えたい。同時に、内的要因や外的要因についても考える機会を設けたい。

1 言語特性とベトナム人学習者

全体傾向からいうと、漢字の知識を有していると言う点で他の東南アジア諸言語を母語とする学生よりも日本語との言語近接性が高いが、文法、音声構造などでは、言語的な隔たりが大きく、

習得の困難さに結びついている可能性が高い。特に音声面での学習困難点が多い。また漢字文化圏であることが原因で負の転移もよく出現する。

1.1 文法習得について

文法取得上の困難点はタイやマレーシアなどの学習者とそれほど異なるわけではない。ベトナム語は孤立語に属し、日本語とは表1のような関係になる。

表1 日本語・ベトナム語の形態—統語的特徴の比較

		日本語	ベトナム語
形態的— 統語的特徴	活用	活用あり又は付属辞の付与	活用なし
	語順の自由度	一部自由	基本的に固定
	基本語順	SOV	SVO
	修飾句の構造	修飾—被修飾	被修飾—修飾

学習者の作文データ分析、文法性判断調査などを行った結果、他のアジア言語を母語とする学習者と比べ、ベトナム語母語話者は様々なタイプの誤用が出現することが明らかになった。例えば名詞句については「の」の過剰脱落、過剰使用、不自然な漢字語の使用、語順の逆転などが見られる。これらの全てが見られるのはベトナム人学習者の特徴である。漢字語の不自然な使用以外ではタイやマレーシアなどの学生と誤用傾向が似通っている。

1.2 文字語彙の習得について

ベトナム語は漢字文化圏であり、漢語由来の語は言語全体の6-7割と言われている。しかしベトナム文字は漢字ではなくアルファベットを使用するため他の非漢字圏と同様に表音文字使用者である。意味や用法には類縁性が見られるので語彙習得には有利である(表2)。しかし負の転移も起こりやすいため、ベトナム語を母語とする日本語学習者に対する漢字語彙指導の際は、教師は漢越語の存在をまず認識した上で、学習者に漢越語知識の活性化を促すことの必要性和、学習者も漢字語彙学習の際は常に漢越語の使い方や意味と対照し学習を進めていくことが重要である。

表2 日本語とベトナム語の対応例

ぼう	どう	暴	動	BẠO	ĐỘNG
せん	とう	戦	闘	CHIẾN	ĐẤU
こ	どく	孤	独	CÔ	ĐỘC

また、漢越音の知識をどのタイミングで活性化させるかを考えることも重要である。図2は旧日本語能力試験の各レベルと和製漢字に含まれる二字の漢字語とベトナム語語彙との対照表である。これをみると、1) 語彙全体では1/4程度に一致か部分一致が見られ、1~2級語彙については日越双方の漢字語の一致度が高いが、4級語彙は日越の一致度は低く、ベトナム語の固有語率が高いことが分かる。さらに、初級前半レベルの学習者に対し、表2のような漢越音と漢字語の対応表を渡して記憶してもらい、リストにあった漢字を用いた別の漢字語を類推する調査をおこなったところ、初級終了時では高い回答率だが、初級前半レベルではほとんど正解できないことが明らかになった。そのため、漢字の知識がある程度備わってくる初級後半からであれば、漢越

語と一対一の対応がある漢字を覚え、漢字の組み合わせから母語訳を類推することは学習を促進すると言える。

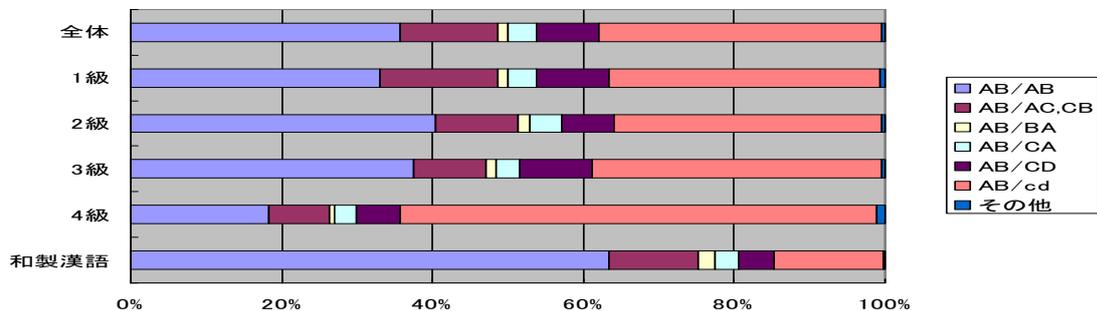


図2 二字の漢字で構成される日本語語彙とベトナム語語彙との対照表 (松田他 2008)

1.3 音声習得について

通常、日本語母語話者がベトナム語母語話者の発話を聞くと「落ち着きがない」「焦っている」「苦しそう」「いかにも外国人っぽい」などの感想が聞かれる。そこで上級レベルのベトナム人、中国人、韓国人、タイ人の読上げ音声に対する日本語母語話者による聴覚印象評価を行ったところ、中国＝韓国>タイ>ベトナムの順で聴覚印象が悪いことが明らかになった。つまりベトナム人は声調言語話者の中でみても発音の不自然さが際立っている。ベトナム人学習者の音声習得上の問題は中国、タイなどの声調言語話者と比較的共通点も多く見られるが、ベトナム人独自の問題も見られる。

表3 日本語とベトナム語の音声対照の概略表

		ベトナム語	日本語	
単音 レベル	音節構造	CVC (閉音節)	基本的に CV (開音節)	
	母音	11	5	
	子音	有気・無気の対立	一部あり (t, th)	なし
		有声・無声の対立	一部あり (kh-g)	あり
		入破音	あり	なし
	末子音の無声閉鎖音の区別	対立が多い	対立がない	
末子音の鼻音の区別	対立が多い	対立がない		
韻律 レベル	アクセント	音節の声調	ピッチアクセント	
	リズム	音節リズム	モーラリズム	
	イントネーション	ほとんどなし	あり	
	リエゾン	なし	なし	

表3は日本語とベトナム語の音声対照の概略表である。文節音の数を考えれば日本語より遥かに複雑であるが、単語によって変化するピッチアクセントやイントネーションの習得、モーラに相当するものがない。また、特に拍の等時性を保つため一つ一つの音節を区切る傾向がある。その際に声門を閉鎖させたり、喉頭を緊張させることがある。それらの動きは他の声調言語より顕著である。そうした動きが日本語の発音を聞きにくく、発音しにくくさせている。また、ベトナム

ム人のイントネーションは不自然で急なピッチ変動が起こっていること、言い直しが過度に多いこと、ベトナム語特有フィラー（「えあん」「あん」）の多発による聞きにくさもある。

音声習得への提案としては初期の段階から日本語とベトナム語の音声上の異なりを説明し、自己モニター力の向上を促したい。発音させる際は、モーラの等時性を維持しながら、一息で発音させたい。中国の日本語教育は初期の段階からアクセント教育を徹底し、一定の効果をあげている。教科書の全ての語彙リストにアクセント記号をつけたい。そして、繰り返したい要求を押さえて延伸して発音させるようにすること、適切なフィラー指導をすることで、効果があがると予想される。発音と連動して聴解力も伸びるはずである。

2 内的要因、外的要因とベトナム人学習者

内的要因には知力、年齢、言語適性、性格、学習スタイルなどが含まれる。そのうち習得に大きな影響を与えるとされる言語適性には以下の能力が含まれる(Carroll1965, 山崎前掲)。

- ①音声識別能力：新しい音声を識別したり、記憶できる能力
- ②文法的感受性：文の統語的構造を認識・識別できる能力
- ③帰納的言語学習能力：実際の言語使用の中から、文法形式と意味における類似点や相違点に帰納的に気づいたり識別したりできる能力
- ④機械的に記憶する能力

これらの内的要因とベトナム人学習者の習得に関する研究は管見の限りない。今後研究すべき重要分野であるが、①に関する点では他の母語の学習者より識別力が弱い傾向が見られる。特にピッチ変動や特殊拍についてはそもそもの識別力が弱い可能性がある。

外的要因には学習環境、学習ストラテジー、教授法、動機づけなどが含まれる。こうした外的要因についての研究には西谷・松田(2003)がある。西谷(前掲)は言語不安がどのような要素から構成され、どういった教室環境を作り出せば学習者の口頭表現における言語不安を低減させることができるかを調査した。因子分析の結果、言語不安の低減に係る学習環境については「分かりやすく役に立つ授業」「話す機会の多い楽しい授業」「正統的授業スタイル」「親しみやすい教師」といった要素が抽出されている。

これらより、ベトナム人学習者は教師による強い指導力を期待していると同時に、話す機会の多い協働学習を求めている傾向がある。このようにベトナム人学習者の習得については学習環境も含め内的要因、外的要因を総合的に研究することが必要である。

参考文献

- 西田まり、松田稔樹(2003)「ベトナム人日本語学習者の外国語不安」『一橋大学留学センター紀要』6、77-89.
- 松田真希子(2012)『ベトナム人日本語学習者の日本語教育のための総合的研究』一橋大学博士論文
- 山崎朝子(2005)「学習者論—学習者の個人差と第2言語学習—」『東京都市大学環境情報学部紀要』pp. 1-10.
- Carroll, J. (1965) The prediction of success in intensive foreign language training. In Glaser, R. (ed) Training, Research, and Education. Univ. of Pittsburgh Press.